



240号
2019/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



お寺参り：中国四川省ガンツー・チベット族自治州丹巴県の山奥に在る女王谷で最も古い歴史を持つボン教のお寺へお参りに訪れた近隣の女性達。肩に掛けたバッグやザックの中には沢山のお線香やお供え物が詰まっています。お寺参りは圧倒的に女性が多く、他の諸々の村の行事や付合い方等を見ても、女王谷で昔からの伝統習慣を伝えているのは女性だと、私は日頃から感じています。 (2015年10月、四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三撮影)

今日は、史記・季布伝に出て来る、「一諾千金」、
「一度交した約束は、千金の重みがあり、必ず守ら
なければならぬ」という意味の言葉です。私には、
あまり馴染みのない言葉だったので、初めは、「一攫
千金」と見間違えてしまいました。

・>・>・>・>・>・>・>・

秦朝の末期、楚の項羽の配下で活躍する季布と言
う軍人がいました。他人のために正義を貫き、信用
を重んじると評判で、人々は彼を敬愛し
ていました。

季布は何回も軍隊を率いて劉邦軍
を破りました。項羽が破れ、漢王朝
が成立してから、劉邦は季布を捕ま
えるよう命令を出しましたが、人々
は、季布が義に厚いのを知ってい
て、また季布に恩義を感じる人が多
かったため、誰も季布を裏切ってそ
の居所を教える人はいませんでした。
暫くして、劉邦に季布の命乞いをす
る人があって、劉邦は季布を許し、
その評判を
聞いて季布を召し抱え、官職を与え
たのでした。

曹邱生と言う人がいて、季布が一夜のうちにお尋
ね者から重臣になったと聞き、大変珍しいことだと
感じて、友達になりたいと思いました。曹邱生は季
布に言いました：「私は、楚の国の人達が『季布に承
知して貰えば安心で、たくさんのお金を貰うより有
難いことだ』と話しているのをよく聞きました。そ
れで、是非あなたとお近づきになりたいと思いまし
た」と言うと、季布は大変喜んで丁寧にもてなしま
した。

曹邱生は諸国を旅して歩きましたが、行く先々で
季布がいかに義を重んじ、人材を大切に育ててきたか
を話して歩きました。それで、季布の「一諾千金」
の名声は全国に広まったのです

・>・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：季布の承諾の一言は千金に値する。日常

で、考えなしに同意してはいけない、の意味。約束の
確かな喩え。承諾の信用度が高いことを言う言葉。

使い方：彼は一諾千金の人だから、絶対約束を破る
ようなことはない。

・>・>・>・>・>・>・>・

子供向けの本ですから、上記のように纏めてあ
りますが、史記によると、曹邱生と言う人は、劉
邦が中国全土を統一する前の戦国時代に活躍した

諸子百家と言われ、様々な技能や弁舌で、

諸国の君主に取りあって生活をしてい
た人の名残りで、各地の有力者と知己
を結び、渡り歩いて生活をしていま
した。史記では弁士と言っています。

季布はこの種の人間が嫌いで、紹介
状を持って訪ねて来た曹邱生を余り
快く思いませんでした。紹介者の顔
を立てて、仕方なく会ってみると、
曹邱生は、「私はあなたと同じ楚の
人間です。楚の人々があなたを敬愛
しているのを知っていますので、是
非お目に掛かりたかったのです。こ
れから私は、行く先々で、楚の人々

が『あなたとのお約束は、千金の重みを持つ』と思
っている話を広めましょう」と話したので、嬉しく
なり曹邱生を懇ろにもてなしました。

この後も曹邱生は、つてを求めて国中の有力者を
訪ね、巡り歩いておりました。滞在する先々で「一
諾千金」或いは「季布一諾」の話をし、季布がいか
に義理を重んじ、約束を大事にしているかを話し伝
えたので、国中の人々が知る所となりました。

そのおかげで、史記編纂の資料を集めていた司馬
遷の耳に入り、列伝巻 100 で取り上げられて、三千
年を経た現代のわれわれがこの言葉とそれにまつわ
るお話をすることが出来るのです。

現代は「何でも PR が全ての世の中」と言われま
すが、現代に限らず、いつの時代でも PR は大事だ
と思い知らされます。古代中国でもこのような状態
なのですから。



満柏

挿絵 満柏氏

Yì zhě sān yǒu, sǔn zhě sān yǒu

益者三友，損者三友

えき しゃ さん ゆう そん しゃ さん ゆう

益者三友、損者三友〈季氏第十六〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

この表題にあるのは孔子が自ら語った言葉で、次のような意味が込められています。友人選びには、得になる場合と損になる場合と、それぞれ三例ある。以下、さらに続きます。「友直，友諒，友多聞，益矣。友便辟，友善柔，友便佞，損矣（Yǒu zhí, yǒu liàng, yǒu duō wén, yì yǐ。Yǒu biàn pì, yǒu shàn róu, yǒu biàn níng, sǔn yǐ）」（直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり）。つまり、真っ正直で、誠実で、博識、こういう人を友人に持てば得をする。逆に、うまく人に取り入り、物腰が柔らかく、口達者な人、そんな人を友人にすると損をする、ということです。

「直」は文字通り解釈すれば、真っ正直。しかし時には一本気で融通が利かないという意味にもなります。「諒」の基本義は「まこと」、日本ではたまに人名などに使われます。決して悪い意味ではありません。しかし悪くすると強情で、意固地、という意味にもなります。「多聞」も博識ということですが、意地悪くとれば、ただの物知りということにもなります。三者とも理想の人物像ではないが、友人に持つならこういう人物の方がプラスになるということです。

これに対して「便辟」とは人に諂うこと、「善柔」とはうわべはやさしいが誠意に欠けること、「便佞」とは口はうまいが心が歪んでいることです。こういう輩は麻薬のように人の心に入り込み、人を駄目にします。孔子が最も警戒したのはこの手の人物でした。頭ではわかっている、お世辞を言われるとついついその気になってしまうのが人間です。

一方で孔子は「人は過ちを犯すものだ」という考えを持っていました。次のようにも言っています。

「主忠信，无友不如己者。过则勿憚改（Zhǔ zhōng xìn, wú yǒu bù rú jǐ zhě。Guò zé wù dàn gǎi）」（忠信を主とし、己に如かざる者を友とする無かれ。過てば、則ち改むるに憚ること勿れ）〈学而第一〉。忠誠と信用を第一に考え、その点で自分より劣ると思ったら、そういう人を友人としてはいけない。もし自分が過ちを犯したときには、素直に改めることだ、と。つまり裏を返せば、自分の過ちを、誠意をもって本気で指摘してくれる人がいたら、そういう人を友人にすべきだということにもなります。「以友輔仁（Yǐ yǒu fǔ rén）」（友を以て仁を輔く）〈顔淵第十二〉。交友関係を通じて人間性を磨く。これは孔子最晩年の愛弟子の一人であった曾子の言葉ですが、孔子の真意を見事に体現しています。

では友人が過ちを犯した場合はどうすればいいのでしょうか。『論語』ではお馴染みの愛弟子、子貢の問いに答えて孔子は次のように言っています。「忠告而善道之，不可则止。勿自辱焉（Zhōng gào ér shàn dǎo zhī, bù kě zé zhǐ。Wù zì rǔ yān）」（忠告して善く道き、不可なれば則ち止む。自ら辱しめらるること勿れ）〈顔淵第十二〉。まず忠告して、善い方向に導いてあげなさい。しかし、どうしても聞き入れてもらえないときには、あまりしつこくしない方がよしい。逆切れされて、かえってバカを見ることのないように、と。これは雄弁家で理論家肌の子貢に対して、その自信過剰に一本釘を刺した言葉とも受け取れます。過ちを改めるかどうかを最終的に決めるのは、忠告を受けた当人であって、忠告する側ではない。だから当人の自覚を気長に待つ。これも友情のうち、ということでしょうか。

（わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師）

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊 (5) 最終回

寺西 俊英

市の最後の訪問地の北固山から金山に戻る途中にある「西津渡街」から書いていきたい。この旅行記も年が改まり、今回のご紹介は、昨年 2018 年 5 月 22 日の続編である。「津度」とは、川の渡し場のことである。昔は西津度から対岸の揚州方面への渡し場が設けられていた。三国時代(220年～280年)には「蒜山渡」と呼ばれ、唐代(618年～907年)には「金陵渡」と名称が変わり、「西津度」と呼ばれるようになったのは宋代(960年～1279年)以降である。しかし、清代以降は長江の流れが北側にあたる揚州側に湾曲して流れたことにより、南側の鎮江市は土砂の堆積で浅瀬が拡がり西津度の港は内陸になってしまった。唐代には李白や白居易、そして宋代にはマルコポーロが訪れているが、宋の時代の街並みがそのまま残っているため別名「宋街」と呼ばれている。マルコポーロの見た西津度の風景が現代でも見られるということである。

バスから降りたところからガイドの案内で当時の街並みに入っていくと、平坦な石畳の道が続いている。そのうちに坂道となったがこの場所に道に沿って幅 1メートル程の大昔からの時代毎の西津度の港の高さが見られる遺跡があり、上部をガラスで覆っている。大昔はこの場所でも水深が随分あったことがこれから分かるが、数百年単位の階段状の遺跡は珍しいのではない。さらに進むと幅 3メートル位の石造りの階段の向こうに、この街の一つのシンボルであるチベット仏教の石塔と仏塔が見えてきた。両サイドは石垣やレンガ塀でレトロな感じの雰囲気である。石段の中央部分は幅 50センチくらいの一輪車が通れるように坂道が造ってあり、港で陸揚げした荷物の運搬に使った。石段を登りきるとまた平坦な道になった。すると急に場違いとも思えるモダンな 3 階建ての建物が見えてきた。旧イギリス領事館である。アヘン戦争終結時、1880 年に中英間で結ばれた南京条約により鎮江は開港させられ、イギリスはこの地に領事官を設けたのである。今は鎮江博物館になっている。イギリスの横暴ぶりが想起される。

さて鎮江の最後に「鎮江香酢」を紹介したい。揚州の名物と言えば、「揚州チャーハン」と「揚州獅子頭」という肉団子を紹介したが、鎮江の名物は「香酢」で、中国人ならみなこのお酢を思い浮かべるといふ。香酢



鎮江の旧英国領事館

は、長期間(5～8年)熟成させることによりアミノ酸含有量が多くなり、日本の黒酢の 10 倍以上、米酢の約 20 倍もあると言われている。免疫力の向上、成人病の予防、美肌、若返り、ダイエットの効果があるとの説明があり、ツアーの何人かは鎮江香酢をお土産に買いこんでいる人もいた。

午後 4 時前に全員バスに乗って無錫に向かって出発した。150 キロ弱の行程で午後 5 時半過ぎに無錫市内の「無錫恒通花園酒店」に到着した。6 時半から 3 階の半島の間で豪華な夕食を摂った後、わりりの友人 4 人で夜風に吹かれようと外に出た。少し歩くと大きなスーパーの前に出た。看板には大きな文字で METRO とある。この名はどこぞで見たような気がしたが思い出せない。そこに入ることにして、食後のデザートとお土産を物色した。紹興酒などを求めレジで代金を払うとレシートにこの店は中国語で「麦得龍」と書かれていた。



5 月 23 日(水)の夜が明けた。この旅も終わりに近づいている。時間過得真快だ。

無錫はご存知のように、無錫旅情の歌詞にあるように太湖の北の端に位置している。3 千年の歴史を持つ古い町で、中国では「江南之名城」と言われ、またその豊かさから「魚米之郷」とも呼ばれる。昔は大量の錫が採れたが漢代に掘り尽くされ、「無錫」という名が付いたと言われる。

ところで「太湖」は太古の昔、東シナ海の一部であった。しかし長江と銭塘江が運ぶ土砂で沖合に平野が形成されたことにより、内陸部に位置するようにな



太湖仙島にある老子像

った。その後流入する河川により淡水湖となった。中国五大湖の一つで、三番目に大きい淡水湖である。面積は 2250 平方キロで東京都よりやや大きい。これまで見てきたように中国の大河の運ぶ土砂の量は半端なものではない。遠い将来、渤海湾は黄河により埋め尽くされ平野となり、また九州との距離は長江により指呼の距離になるかも知れない。

ホテルを 8 時半に出発し、「太湖鼈頭渚」に向かう。無錫の名勝の一番の人気スポットである。ここは無錫市街から西側の太湖に突き出た小さな半島にある公園で、巨大な岩が頭をあげたスッポンに似ていることから付けられた名前である。亀 (guī) の字に似ているが鼈 (yuán) は、大型のスッポンのことだ。この半島によって区切られたような細長い湖を「蠡湖」と呼ぶが、その一角にある「蠡園」は風光明媚なことで知られる。名前の由来は、春秋時代越王・勾踐の家来で呉王・夫差を倒すのに功績のあった功臣の范蠡(はんれい)が、官を辞したあと天下の美女・西施とこの地で過ごしたという逸話からという。

我々が訪れた日は快晴で公園を海沿いに歩いて行った。湖面は太陽の光で輝きまるで一枚の巨大な鏡のようである。太湖と言えば「太湖石」である。太湖に臨む大きな太湖石の石碑のそばに来た。石碑には中山大三郎氏が作詞・作曲し、尾形大作が歌った「無錫旅情」の歌詞が刻まれていて旅情を誘う。この歌がヒットしたのは今から 30 数年前の 1986 年のことである。この場所からまもなく遊覧船乗り場に到着した。我々は遊覧船に乗り込み遙か沖合に小さく見える「太湖仙島」に向かった。太湖仙島は別名を「三山」という。歌にある、〈♪はるか小島は三山か〉の三山で仙島は三つの小さな島から成っている。10 分くらい乗ったであろうか。波止場に着き、そこからしばらく歩くと島の中央に道教寺院が現れた。入り口の壁に「至虚無上」とい



太湖石に刻まれた「無錫旅情」歌碑

う道教の言葉が書かれている。中には大きなものは何でも好きな中国らしい見上げるような仏像がありとても見ごたえがある。そこから沿岸に出ると、これまた巨大な釈迦像、老子像、孔子像と中国における 3 大宗教の人物像が並んで置かれている。ありがたみはあまり感じないが、一見の価値はあった。島で 1 時間半くらいあちこち見学した後、11 時半頃また船に乗り戻った。皆バスに乗り「紫雲鮮館」というホテルで食事をとった。無錫について最後に一つ書き加えたい。町田市のお隣の相模原市は、無錫市と 1985 年に友好都市締結を行った。それから 30 数年経過しているが、毎年のように相互訪問を重ねている。しかし友好都市というものは一朝一夕に締結できるものではない。中華人民共和国が成立し、8 年後の 1957 年に当時の中国政府の王震農墾部長（後の国家副主席）が農業視察で相模原市を訪問し、これがきっかけとなり交流が始まったのだ。実に 60 数年の交流である。政府間ではいろいろあるが、やはり民間交流はとても大切である。

食後、午後 1 時に出発。一路上海に向かった。途中、陽澄湖サービスエリアでトイレ休憩。このサービスエリアは何度も利用したので懐かしい。上海は過去何度も書いたので、以下簡単に触れたい。15 時半に豫園に到着。入場料は 40 元であったが、60 歳以上は半額なのでパスポートを見せて 20 元で入場した。夜は黄浦江遊覧。翌 24 日は、午前中は、上海博物館に行き 2 時間ゆったりと鑑賞した。昼食は博物館から歩いてすぐのレストランに行く。食後 12 時 45 分出発、途中お土産を見たいという要望に応じてスーパーに立ち寄りし、午後 2 時に上海浦東飛行場に着いた。飛行機は 18 時 30 分の MU575 便である。16 時半頃 17 番搭乗口に集合。羽田には 20 時 50 分過ぎに無事着陸した。2 時間 10 分のフライトであった。思い出多き旅であった。

(おわり)

✪長安を「範」とした 仏教都市＝平城京

平城京は、710年にできました。しかし、794年わずか70余年を経て、その寿命を終えました。その後、長岡京を経て、平安京に遷都されました。捨てるにはいささか惜しかったような気がします。

当時の平城京は、「仏教都市」と称するのにふさわしい大寺が立ち並んでいました。ざっと並べると、薬師寺・大安寺・興福寺・元興寺・葛城寺・紀寺・東大寺・法華寺・唐招提寺・西大寺・西隆寺などが、

並立されていました。狭い首都の内外には僧侶が満ちあふれていたことでしょう。奈良朝時代の日本の人口は5～600万人と推定されますが、それを管理する(国勢事務)役人は1万人といわれます。その家族と使用人がざっと20万人程度、これらが平城京の人口だったといわれます。

私の日本史は、この奈良時代の名刹「唐招提寺と鑑真和上」に尽きます。

「南大門をくぐって、屋根の両端に鷗尾しびをあげた金堂を仰ぐと、心が天平の世にかえるような気がする」とは、司馬遼太郎氏の「この国のかたち(三)」の一節ですが、唐招提寺に関する著書の巻頭には皆さん同様の感動が記されているようです。それだけ、えもいわれぬ魅力を持つ寺ではないかと思っています。

✪唐風の「律」「令」のはじまり

「律」とは刑法、「令」とは行政法のことです。前世紀までの日本は、統一国家とはかけ離れて、津々浦々の諸豪族の郡立状態でした。唐より持ち

込まれた「律・令」という投網を打ち、農地という農地、人間という人間を、律令国家がまとめて所有し、統一国家を築いたのです。

不思議と思われませんが、この間、軍事力は用いられる事は無く、それぞれはその権利を放棄しています。はるか千数百年の後、1871年(明治4年)の廃藩置県にも同様なことが起きています。それぞれの大名は「新政府」誕生を前に、各の土地・住民を国家に差し出したのです。「世界の普遍的文明」の前に、国民は従うと言う気質は不変のようです。

ついでながら・・・

この「律令国家」は、奈良時代が最盛期でした。続く平安時代になって崩れはじめ、やがて東国を中心に「武士」という反律令的農場主が勃興し、ついには12世紀末、鎌倉幕府という極めて日本的な政権が誕生し、これによって「律令」制度は事実上無くなりました。日本史が、中国や朝鮮と制度を異にし始めたのは、この時代からといえるでしょう。

✪なぜ、平安京に遷都されたのか

わずか70余年で都が京都に移りました。そのわけは？

最大の原因は仏教だと思います。平城京に建立された大寺は、みな国立(官寺)です。当然そこに所属する僧はみな「官僧」です。いわゆる国家公務員ですから官吏と同じです。というより、官吏以上に国家と人心を支配していたのでしょう。

もともと、奈良仏教は隋唐仏教を本家として展開していました。隋唐仏教は、「鎮護国家」が大原理でしたから、奈良の大寺の僧としては、僧が国家を守護するのは当然であり、また権利であり、国家そのものと考えたのは当然といえるでしょう。先に挙げた大寺の多くは、堂々たる大陸風の建造物です。柱も桁けたもふとく、ずっしりと安定し、伽藍配置もで

きるだけ隋唐の範に従っていました。もちろんこれらの大寺を造営するのは国家です。それらを修理するのも国家です。国家は官僧に俸禄を与え、法要も国費です。経巻も国家が買います。

一方では、彼ら（奈良の僧侶）は、民の救済などは考えていませんでした。官僧同士でもみ合い、派閥抗争をしていました。当然、宮中も政府も落ち着くいとまありませんでした。そんなわけで、宮中も政府も、首都そのものが大寺を置き捨てて、奈良を脱出したのでしょう。その証拠として、平安京遷都に際して、「新首都では大寺の造営が禁止された」という事実があります。

✪新首都で興った平安仏教

平安仏教は、「貴族のために加持祈祷はするが、俗権に入り込むことはしなかった」、いわば、政治には関わらなかったということです。

今日の京都には、いわゆる「古刹」といわれる寺が多くありますが、それらの多くは、遥かに下って豊臣期や江戸期に興されたものが多いのです。たとえば、浄土真宗総本山の西本願寺・東本願寺は豊臣期から江戸初期にかけて京に移されたもの。浄土宗総本山の知恩院は、徳川家の宗旨寺として江戸初期に東山に興されました。それらのほとんどは「個人の安心立命」が中心で、信仰中心の鎌倉仏教です。

一方、平安末期には多くの「門跡寺院」がつけられました。寺というより、その本質は僧の住居です。東山山麓の妙法院（天台宗）、粟田口の青蓮院（天台宗）、左京区の聖護院（修験宗）、御室の仁和寺（真言宗）、嵯峨の大覚寺（真言宗）などがそれで、奈良の大寺のようなものではありません。

✪平城仏教と平安・鎌倉仏教（参考：Wikipedia）

紀元前5世紀にインドで生まれた仏教が中国を経て日本に移って、その面影は全く異なるものになりました。以下は仏教を「文化」という視点で

ざ〜とまとめてみました。

平城仏教は、「鎮護国家」という思想のもと、律令国家によって保護された奈良時代の南都六宗、いわゆる奈良仏教で三論宗、成実宗、俱舍宗、法相宗、華嚴宗、律宗で、現在は後者3宗が現存しています。これらの六宗は学派的要素が強く、仏教の教理の研究を中心に行っていた学僧衆の集まりであったといわれています。

一方、平安仏教は、学問的能力を重視した顕教（秘密にせず、明らかに説かれた教え）にしても、厳しい修行と超人的能力を前提とする密教にしても、貴族仏教としての性格が強い。そうしたなかで、時代の変化、すなわち武士階級の台頭があります。一般庶民は、相次ぐ戦乱と飢饉に末法の世の到来を実感し、あたらしい救いを仏教に求めました。こうした要望にこたえたのが、信心や修行のあり方に着目した念仏と題目、そして「禅」の教えでした。これらは、庶民や新興武士階級にも受容できる仏教のあり方でした。そして、民衆の生活に奥深く浸透して、鎌倉仏教となりました。大陸から伝わった仏教の「日本化」を示す現象でしょう。

鎌倉仏教は、

- ・易行…厳しい修行ではない
- ・選択…救済方法を一つ選ぶ
- ・専修…ひたすらに打ち込む

などの特徴を有するといわれ、特に念仏を重んじる浄土系の浄土宗・浄土真宗・時宗に顕著にみられます。浄土系諸門はみずからを「他力易行門」と称し、禅宗（臨済宗、曹洞宗）の実践する座禅を「自力」のわざであり、「難行」であると批判されましたが、悟りに到達する方法として一つを選び、それに打ち込むあり方においては、禅宗もまた鎌倉時代に成立した他の「新仏教」諸派に共通する要素をもっています。

四川省北西部に在る丹巴などの女王谷(ギャロン)と周辺、それにチベット東部に多く残っている高い石の塔は、形(四角や八角や13角)や高さや建てられた時代や用途が様々です。詳細な説明は幾つもの分厚い本や論文等(注¹)に譲って、ここでは(個人的偏見が混じった)概要とトピックスだけをご紹介します。

1. 神殿

領主の館に有った高い石の塔は古代ボン教の世界構造だった9層で、最上部が神意を聞く神殿、その下が宝物蔵、その下が領主の居住区だったと考えられます。

隋書の女国や唐書の東女国に記された「女王が住む9層の塔を持つ館」を彷彿とさせる領主の館の一つは、250年位前まで丹巴の北隣の金川県に在った大領主の館です。清朝乾隆帝が女王谷へ進出した時に完全に破壊されましたが、乾隆帝が領主の館の全景を記録させています(写真1)。



写真 1



写真 2

二つ目が、70年位前まで丹巴の北部に在った小領主の館です。革命の時に破壊されましたが、約100年前に描かれた絵画を撮影したフィルムが残っています(写真2一部復元)。なおこの絵画の右側に描かれている雉は今も周辺の山中で見掛けます。

集落の高い場所に建てられた塔も昔は神意を聞く神殿だったようで、今でも近くに香木を焚き神へ奉納するための石の台が残っている場所があります(写真3)。

2. 見張り狼煙台

250年前前後の金川戦役の時代に数多くの見張り狼煙台が建てられました。女王谷で最も高い50m以上も有る塔もこの時代の物です。領地の境界に建てられた塔も見張り狼煙台です(写真4)。金川戦役の時、多く建てられたと同時に多くが破壊されましたが、生き残ったこの種の塔はその後倉庫に使われたり、取り壊して石材を新しく建てる民家に流用した



写真 3



写真 4

りされています。

3. 倉庫避難住居

子沢山の家や富豪な家が繁栄を祈って神への捧げものとして建て、倉庫や避難住居に使っている塔です(写真 5)。2017年2月に「わんりい」の方々が丹巴の春節を参観された時に登った塔も、この一つです。

高い石の塔は、近年セメントを使って 20m 位までの物が博物館や観光用に建てられていますが、もっと高い泥で固めながら石を積む塔は数 100 年以上の間建てられておらず技術の伝承が途絶えたと言われています。

注 1) 「Secret Towers of the Himalayas」 Frederique Darragon, Shenzhen Media Group Publishing House, September 2005, ISBN7-80709-043-X

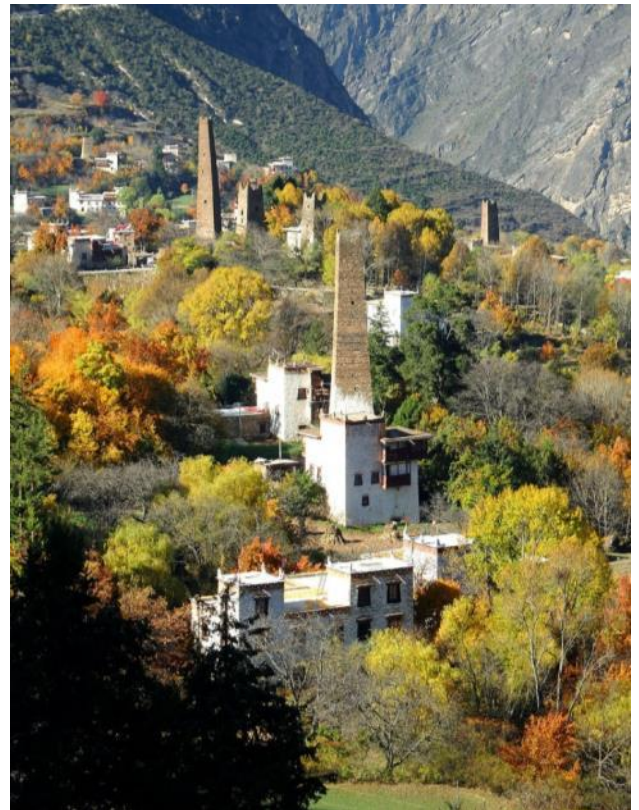


写真 5

●大川さんのホームページはこちら <http://rgyalmonrong.info/index.htm>

<http://rgyalmonrong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷の HP (<http://rgyalmonrong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ (MP4 形式 8MB 前後) 1 分余り×15 本を追加しました。日本語 HP に入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。(<http://rgyalmonrong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

「漢詩の会」たより 26

(2018年11月25日)

李白と常建の「春夜洛城に笛を聞く」

報告:花岡風子

本日第一首目のお題は、李白の名作中の一つ『春夜洛城に笛を聞く』でした。李白の詩はこれまでも幾度となく取り上げられ、その人生もご紹介して来ましたが、この詩は彼が故郷を後にして放浪の旅を続け、長安の都にたどり着く数年前、洛陽に立ち寄った時のものとされています。当時洛陽は長安に次ぐ大都市でした。

chūn yè luò chéng wén dí lǐ bái
春 夜 洛 城 闻 笛 李 白

shuí jiā yù dí àn fēi shēng
谁 家 玉 笛 暗 飞 声
sàn rù chūn fēng mǎn luò chéng
散 入 春 风 满 洛 城

cǐ yè qū zhōng wén zhé liǔ
此 夜 曲 中 闻 折 柳
hé rén bù qǐ gù yuán qíng
何 人 不 起 故 园 情

春夜洛城に笛を聞く

誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす
散じて春風に入りて洛城に満つ
此の夜曲中折柳を聞く
何人か故園の情を起さざらん

いつになく寝つかれない宿の寝床の中で、何度も寝返りを打つうち、何処からともなく漏れ聞こえる笛の音にハツとする、そんな作者の姿が浮かびます。聞き入っているうちに、調べは別れの曲を奏で始め、別れた家族や友人の顔が次々と思ひ

浮かぶ。やがて枕に顔を埋めるようなしぐさが連想され、もの悲しげな笛の音と春風の音に入り混じり、作者の深い吐息までもが聴こえてくるような詩です。「李絶杜律」と言われるように、杜甫が律詩を得意としたのに対し、李白は絶句を得意としていました。この詩も李白得意の見事な絶句と言わざるを得ません。

「折柳」または「折楊柳」という言葉は漢詩の常套句の一つで、「別れ」を意味します。柳の枝を折って旅立つ相手への餞はなむけにするという風習からきたものとされています。また「故園の情」と言うのは「望郷の念」のことで、漢詩ではよく使われるそうです。

思い起こせば、中国語を習い始めた頃「花落有意，流水无情」という言葉が、片想いを表すと知って、中国語にとってもロマンを感じたことがありました。中国人は現実を重んじる民族であるとよく言われますが、その歴史はロマンに満ちていて、そのロマンを紡ぐ言葉にも魅力を感じます。

植田先生が「この折柳からどうしても連想せざるを得ない」と、かつて取り上げた、王之渙おうしかんの『涼州詞りょうしゅうし』と題する辺塞詩をホワイトボードに板書されたのを皆で音読しました。

huáng hé yuǎn shàng bái yún jiān

黄河远上白云间

yī piàn gū chéng wàn rèn shān

一片孤城万仞山

qiāng dí hé xū yuàn yáng liǔ

羌笛何须怨杨柳

chūn fēng bú dù yù mén guān

春风不度玉门关

声に出して読んでみると、黙読とは違う世界が広がります。音の世界は心を揺さぶるものがありますね。この詩の三句目の「怨楊柳」は別れを恨む、という意味で使われています。

「王之渙は実際に辺境の地に行った形跡はないんですよ。当時、辺境に近い涼州で流行っていた歌をモチーフにして、絶句体で書かれたものですが、同じ題名でこの類のものはたくさんあります。さてこの詩は、文法的に考えれば考えるほど意味がよく分からないけれど、荒涼とした大地と、春

風も吹かないような寂しいところに行く友を送る、という心情だけはヒシヒシと伝わりますね。「」はるばる来たぜ函館」などと、函館に行ったことがない人が歌うカラオケと同じだね。」の一言には、この歌、アラフォー世代の女子にはなじみの薄い歌かなと思いつつ、周りで笑っていらっしゃる先輩方の面々をチラ見しておりました。(笑)

二首目はその辺塞詩とのつながりから、常建という詩人の『塞下曲さいかのきょく』其二が取り上げられました。この詩はどういうわけか、中国より日本で有名で、詩吟では定番になっているそうです。というのも、昔から日本人に親しまれてきた『唐詩選』に載っているからでしょうか。しかし中国人の好んで読む『唐詩三百首』には載っていないせいか、中国ではさほど有名ではないのだそうです。中国では同時期に作られた『塞下曲』其一の方がよく知られています。

作者の常建は生卒年不詳です。若い頃、科挙に合格したものの、役人生活が性に合わず、隠遁生活を送った人らしいです。李白のような超天才詩人はともかく、一般にお役人として出世しなかった人は記録が残らず、詳しいことは伝わりにくいようです。いずれにせよ、盛唐の詩人であることだけははっきりしています。年齢は李白より年下、杜甫より年上であったであろう、とのことですね。

sāi xià qū qí èr cháng jiàn

塞下曲 其二 常建

běi hǎi yīn fēng dòng dì lái

北海阴风动地来

míng jūn cí shàng wàng lóng duī

明君祠上望龙堆

dú lóu jiē shì cháng chéng zú

髑髅皆是长城卒，

rì mù shā chǎng fēi zuò huī

日暮沙场飞作灰。

一句目は「北海の陰風地を動かして来たる」という何となく不気味な始まりです。北海というのは海ではなく、北の方にあると思われていた湖のことで、実際には北方の砂漠地帯を連想させます。そこから立ち上る風が大地を這うように、砂嵐を

起こしつつ迫ってきます。「中国語では風が吹くことを『刮風』と言いますが、髭を剃るのも『刮臉』と言いますね。『吹風』という言い方もありますけど、これは春風という感じですね。」と植田先生。なるほど北方の風の吹き方は南方の春風のような穏やかなものではなく、大地の砂を吹き上げるような、つまり大地ごと動くような吹き方なのだ、改めて思わされました。

二句目は「明君祠上龍堆を望む」とあります。これは、漢代の悲劇のヒロイン王昭君の墓から、龍堆（龍のようにうねる砂丘）を見渡すこと。そして三句目は一転して「髑髏は 尽く是れ長城の卒」と続きます。そこには長城に駆り出された兵卒たちの髑髏があちこちに転がっている。そして最後はその髑髏が「日暮砂場に飛んで灰と作る」。つまり、その髑髏が夕闇迫る戦場に砕け散って灰となっている、というのです。荒涼とした凄まじい光景ですね。なお「沙場」には戦場という意味もあります。

これも七言絶句で、まるで絵に描いたような「起承転結」で構成されています。最後の句で骨が灰となって砂に混じり、それがまた一句目の「北海の陰風」へと返ってきます。「戦争の悲惨さを強調した詩ともいえますね」と、植田先生。常建も辺境の地に実際赴いた経歴はなく、悲惨な砂漠の光景を頭の中でイメージして作った詩のようです。

「でも、頭ん中で作った詩が悪いわけではないですよね。」「リズムがよく朗読しやすい詩でもあります。」と植田先生。『塞下曲』という題名の作品も『涼州詞』と同様、流行歌として多くの詩人達が手がけています。ちなみに同一作者の『塞下曲』其一は凱旋を讃え、平和の喜びを詠っています。

さて、今朝アラフォー女子は朝の散歩で久しぶりに、12月初旬の枯れ落ち葉を踏んで歩きました。足元で立てるパリパリと乾いた音を聞いていると、「失意は落ち葉に似ている」、ふと、そんな思いが込み上げてきました。落ちた時は色とりどりだった落ち葉もやがては色褪せ、乾き、砕けて土になる。人間も同じじゃないか、と思いました。大きいのも小さいのも、立派なものもそうでないのも、最後は土になる。それが自然の摂理なのだ、と。

人は心の中の風景と同じものを外に見、そして空想する。だとしたら、自身は都に居ながらも、

辺境のどこまでも続く荒涼とした砂漠と、人知れず朽ち果て、やがて砂になる人骨を空想している常建の心の内は、きっと失意に満ちていたに違いないと思うのです（このところは漢詩になりそう?）。

役人として、うまく立ち回ることが出来なかった不器用な人物と、その失意が、やはり世間で器用に立ち回れない不器用なアラフォー女子の自分と重なり、ことのほか、この詩人のやるせなさが胸に迫りくるのです。

最後にもう一首、すでにお馴染みの辺塞詩を、先生は復習の材料として板書されました。

liáng zhōu cí wáng hàn

涼州詞 王翰

pú táo měi jiǔ yè guāng bēi

葡萄美酒夜光杯

yù yǐn pí pá mǎ shàng cuī

欲饮琵琶马上催。

zuì wò shā chǎng jūn mò xiào

醉卧沙场君莫笑，

gǔ lái zhēng zhàn jǐ rén huí

古来征战几人回。

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲して琵琶 馬上に催す

酔うて沙場に臥す 君笑う莫れ

古来征戦 幾人か回る

「これも辺境の地をイメージしながら、想像から生まれた詩でしょう。王翰は科挙に合格しながらも、終始飲んだくれの人生を送った人で、自ら辺境に赴いたという形跡は見当たりませんね。それに、辺境に駆り出された兵士たちが、実際、馬上で葡萄の美酒、つまり高級ワインを、これまた稀少で高価な夜光の杯で飲んだとは思えませんしね。」と、植田先生。

先生のお話しに頷きながらも、一方、死の世界へと赴く兵士の凄まじいまでの虚しさが、美しい短編フィルムのようなロマンにまで昇華されたこの詩は、やはり名作中の名作だなあ、とため息をつく私でした。

陝北の旅・報告そのⅢ 橋 詰 滋

★4日目（9月26日）の続き

（前回までのあらすじ）

この日は、乾坤湾→清水湾を経て、文安驛に行く予定でしたが、時間的に少し余裕がありましたので、習近平国家主席が文化大革命の折に下放されていた梁家河村に立ち寄ることになりました。

我々は、遊園地の絶叫マシンよりも絶叫を体感できるバスに揺られ、5分程で梁家河村に到着しました。近くに商店がありましたので、そこで地元産のお酒などの商品を物色し、今晚のお酒は何にしようかなと呑気に考えていました。

★そのとき、思いがけないトラブル！！

1台のパトカーが商店の前に止まり、警察官がぞくぞくと降りてきて、我々の方に向かってきま

した。警察官の一人が黄氏と会話した後、我々に一緒に交番まで来るよう指示しました。

我々は、バスに乗せられ、パトカーの先導のもと、交番に連行(?)させられました。誰かが「今日の宿は留置所ではないのかな?」と言っていたのを覚えています。中国の留置所がどうなっているのか興味がありますが、やはり泊まりたくはありません。

交番に到着後、交番の奥にある警察官の仮眠所に押し込められ、しばし待たされました。

警察官と黄氏との交渉が続いた後、警察官からパスポートを提出させられ、梁家河村へ入場するための手続きをさせられた後、我々は解放されました。この間、時間では30分くらいだったと思いますが、2時間くらいに感じました。

結局、我々が何故交番に連れてこられたのかについて不明ですが、ある人曰く「黄さんが専用バスの運転手に速すぎると注意したから、運転手が警察官に怪しい外国人がいると告げ口をしたからじゃないのか」。

最後に、警察官に記念撮影をお願いしましたが、もちろんNGだったため、我々を先導したパトカーの写真を掲載します。

我々は解放された後、習近平が下放時代に過ごしたヤオトンを見学しました。習近平のヤオトンは当時のまま残されていて、彼がこんなに粗末な暮らしをして、そこから立志出世したということが強調されているようでした。中国国内の共産党や政府関係機関、企業の社会科見学の場となっているようであり、見学者は非常に多かったが、やはり外国人は我々だけでありました。

見学後、専用バスに乗り、梁家河村の入口まで戻りました。帰りのバスは行きほど飛ばしていませんでしたが、バスの運転手は、同僚の女性と私



パトカーと槇野氏



習近平のヤオトンの内部



文安驛の門の前で記念撮影

語をしながら運転をし、安全運転とはほど遠いものでした。

再び、趙氏が運転する安全なバスに乗り換え、文安驛に5分くらいで到着し、この日の宿にチェックインしました。宿はヤオトンを利用したものでありますが、内装は非常にきれいであり、シャワー、水洗トイレ、テレビ、Wi-Fiなどの近代的な設備が完備され、快適に過ごすことが可能であります。ただ、この日の宿では、楨野氏・浪花氏の部屋で、部屋のドアが完全に閉まらないというトラブルに見舞われました。毎回、何らかのトラブルが発生することにも、だんだん慣れてきました。

宿に到着後、黄氏が忙しそうに、宿のスタッフと何らかのやり取りをしていたことが印象に残っています。この時は、黄氏の行動が次の日に起こるサプライズにつながることに思いませんでした。

文安驛の町を散策した後、文安驛のヤオトンを改装したレストランにて夕食を取り、この日の行程は終了しました。

結局、この日も天気が悪く、名月を眺めることはできなかったことは残念であります。

★5日目（9月27日）

私は6時頃に起床し、宿の敷地を散策しました。宿は、3穴のヤオトンで1組の長屋を構成し、宿の敷地内に20組くらいの長屋があり、一つの集落みたいになっていました。宿内を30分くらい



樊さんの作品

かけて散策し、朝靄に包まれたヤオトンの集落はとても幻想的でありました。

7時に朝食を取りましたが、ここでも、飲み物がなく、申し訳ない程度にお粥があるのみでした。やはり、この地域の方は朝食のときには、飲み物を飲まないのだろうと、勝手に思い込むことになりました。

我々は8時半に宿をチェックアウトしました。この日の最初の目的地は高鳳蓮芸術館であります。ここは、この「わんりい」にも度々記載があります。高鳳蓮さんの剪紙を展示した美術館であります。高鳳蓮さんに関する説明については、「わんりい」に掲載された過去の有為楠さん等の記事にお譲りしたいと思います。（「黄土高原に咲く目にも彩なる花々・剪紙」で検索可）

高鳳蓮芸術館に行くときになって、前日に黄氏が、忙しそうに宿のスタッフの方とやりとりをしていた理由が判明しました。宿より地元の延川県の役場を通じて高鳳蓮さんの娘さんに連絡をとって、娘さんの劉潔琮氏とその旦那さんが10キロ先の延川県より早朝にも拘らず、宿まで御足労いただくことになっておりました。これには、皆さん驚くあまりで、何と言ってよいのか、ただ感謝をするのみでありました。

我々一行は劉夫妻ともに、高鳳蓮芸術館へ向かいました。道中、舗装されているが大変険しい山道を走り、15分くらいで到着しました。なんと、一昔前までは、舗装された道でなく、獣道みたいなところを徒歩のみで登っていたようであります。



芸術館の前で記念撮影

芸術館は高鳳蓮さんのヤオトンの自宅を改装し、1室では高鳳蓮さんの過去の国内外で受賞した華麗な経歴が掲示してあり、他の3室では高鳳蓮さん、娘の劉洁琼さんそして、外孫の樊蓉蓉さんの作品が展示してありました。作品は非常に繊細であり、ひとつでもハサミの入れ方を間違えたら、全てが水の泡となるようなものであり、このような作業ができることに恐れ入りました。これらの作品を柳田夫人がとても真剣な眼差しで鑑賞していたことは印象に残っています。

私は芸術に無頓着であるため、作品の素晴らしさをうまく表現できないため、有為楠さんの過去の記事を参考にしたいです。

劉さん曰く。「女性は大人になったら、自分で剪纸ができ、それは犬が成長したら噛むことができるように」とのこと。この地域の女性にとっては、剪纸は生活の一部であるということですね。

高さん、劉さん、樊さんと時間が進むに連れて、作品の題材も現代的になりつつある感じがしました。特に、樊さんの作品では、男女の恋愛を表現したものもあり、今の若者からも受けそうな作品であります。

数多くの作品を堪能したあと、我々は劉夫妻をご自宅に送るため、共に延川県に向かいました。途中、延川県が生んだ著名な作家である路遥の旧居があると聞いたため、少し予定を変更し訪問しようと思いました。旧居の入口にて、管理人から入場料が1人30元であり、チケットの購入場所が旧居の入口から300m位離れた場所にあることを



文安驛の門の前で記念撮影

聞き、時間の都合上、訪問を諦めました。

延川県にて、我々は劉夫妻と昼食を取ったのち、お別れとなりました。聞くところによれば、夫妻はご多忙のなかボランティアで御足労いただき、高鳳蓮芸術館の入場料も無料だったらしい。本当に感謝します。

劉夫妻と別れたあと、我々は一路西安に向けて、6時間に渡る長旅に出発しました。途中、2回の休憩をはさみ、18時半すぎに西安に到着しました。我々はホテル内のレストランで食事を取った後、私は楨野氏・浪花氏とで街に散策に出ました。

西安の街では非常に多くの外国人観光客(中国人以外)を目にしました。9月22日に西安空港到着後、4日間我々以外の外国人に出会ったことがなく、我々は本当に誰も行かない中国の秘境の地に行っていたことに気づかされました。これも、普通の旅行会社が行うツアーでは体験できない醍醐味であります。

西安の街はまさに不夜城であり、至る所がライトアップされていました。中心部にある鐘楼は時間が遅かった(20時ごろ閉館)ため、入場することはできず、外から眺めるだけで終わったことが残念です。我々は1時間ばかりの散策を終え、宿に戻り、明日の兵馬俑見学に備えて、休みました。今回掲載の写真も全て浪花氏からのご提供によるものであります。ありがとうございました。

(続く)



海外出張の思い出（帰国に向けて⑪）

高島 敬明

色々なことがありましたが、仕事は順調に進みました。「寒くなる前に計画を変更して帰国できるようにします。」とのプロマネの話がアツという間に広がりました。ソ連の技術でできる仕事はソ連にお願いして、多くの人々が帰国することになりました。赤字現場であるので少しでも費用削減の考えがあったものと思います。

私の会社でも私を入れて3名を残してあとは帰国することが決まりました。皆大喜びでしたが、9月号に書きましたように流量計のトラックからの落下事故で本体は現地では調整できないとの結論が出て、結局日本に送り返して調整後再度送られて来ることになりました。黒海からトルコのイスタンブールを経て地中海に入り、スエズ運河を通りインド洋、インドネシアのマラッカ海峡、南シナ海を廻る遠い遠い航海です。往復で3か月から6か月かかるだろうと言われました。従って帰国は早くて翌年の2月後半、遅ければ4月頃になるのです。落下事故さえ無ければと嘆息したものです。その間電気計装の仕事しかなく、寒い中細々とそのお手伝いしかないので、あらかた工事は終わっていましたので、強制送還されてもいいかと規則に目をつむって作業員に誘われるままに送別会だとか何とか言って、街の2軒しかないレストランに連れていかれ飲み会をするようになりました。私は責任者なので外出は規則でほぼ禁止されていましたが……

作業員はしょっちゅう行っているのでレストランでは顔でフリーパスです。たくさんのお客に混じって日本人もソ連人も何かにつかれたように、生バンドに合わせ思い思いに体を動して踊っていました。お客は若い女性がなぜか多く、後で分かったことですが、多くは例の6000人の看護婦学校の生徒だということでした。飲んで席に話しかけて来る女性もいて、その時は何となく危険(?)を感じたので早めに退散しました。

2月に入り、待ちに待った「流量計」が到着しました。しかし冬の海は荒れて仕事になりません。

作業が完全に終わったのは3月後半だったと記憶しています。帰国する日が次第に近づいて来ました。この頃フルシチョフの力も弱まったのか政情不安が続き、モスクワでは時々共産党の大きな集会があるようになって航空券が取れなくなることがありました。帰国が2000キロ余りの列車の旅になるかも知れないとの話もあり、皆色めき立ちました。私は、一週間の汽車の旅を望んでいましたが他の人は反対でした。列車を実際に見てきましたが、仕組みがよく分かりません。幅も広く中は綺麗な車両でしたが、結局航空券が取れ飛行機になってしまいました。私としてはまたないソ連国内の一週間の寝台列車の旅のチャンスでしたが、非常に残念に思いました。

いよいよ帰国が近づいて我々の間ではお土産の事だとか、何かと大騒ぎしていましたが当然寺島さんも知っていたわけですが、通常の会話の中ではお互いそのことには触れることは有りませんでした。帰国する日の2週間位前だったと思います。航空券も手配され周りが慌ただしくなった中で、いつもの「夜のミーティング」で寺島さんに、帰国が決まったこと、大変お世話になった感謝の気持ち、寺島さんが元気で過ごされますよう、などを酒に任せて努めて明るく伝えました。これに対して寺島さんは、「そうですか！ それはよかったです。これから日本を背負っていかれる人達だから体に気を付けて頑張ってください」と気落ちした様子もなく私の手を両手で握って、いつまでも放しませんでした。時には寺島のこと思い出してください、と言ったと思います。夜も更けてお開きになるころ、寺島さんから「高島さん、今度の土、日は休ませていただきます」と話しかけられました。土曜日の早朝一人でせかせかと出ていかれました。

日曜日の夕食前に、疲れた風でもなく元気に帰って私の部屋に挨拶に見えました。夕食もそこに班長他2名と寺島さん、4～5名入れ替わりながら恒例の「夜のミーティング」が始まりました。

た。酔うほどに夜も更けてきて皆は部屋に引き上げていき寺島さんと2人になりました。寺島さんは一度部屋に戻り、何か粗末な紙に包まれたものを持って来られました。そして「高島さん、本当にお世話になりました。昨日家に帰りこんなものを持って参りました。」と言われるのです。土日のお休みにノボロシースクからご自宅のあるトアブセまで長時間バスに揺られながら、何も話さないでこの品物を取りに帰っていたのです。中から直径30cmほどのレコード盤3枚、箱に入ったジョ二黒のウイスキー、それに手紙を出されました。寺島さんは、「レコードは<カチューシャ>等ロシア民謡が入っています。ウイスキーはお帰りになってご家族、皆さんで飲んでください」と説明されました。ジョ二黒は当時のソ連では最高級品です。見るとウイスキーの入った箱は、角々が擦り切れ地肌が出て丸くなっています。ソ連の人達の間でのお礼の品物として何回も使われたのが分かります。綺麗な字で書かれた手紙は、札幌の住所が書かれた74歳のお兄さん、寺島親蔵（ちかぞう）さんへの手紙でした。お兄さんとは前々から手紙のやりとりはしているとのことでしたが、この頃は半年に1回も返事が来なくて心配されていたようです。近況と兄弟・親族の様子を知らせて欲しいとの内容でした。

私は涙が出そうになりましたが必死にこらえました。ここまで私のことを考えてくれたんだと思うと、どうして私の方から先にこの話をしなかったのかと悔やまれました。それから二人はこのような話をしたのです。「寺島さん、レコードはありがたいいただきます。また、手紙は写真を付けて間違いなく札幌のお兄さんにお送りいたします。ただウイスキーは重くて持って帰られませんが」「そうですか、仕方ありませんね。このレコードを聴くときは私のことを思い出してください。」「もちろんです。寺島さん、私からはお渡しできるものは何もありません。大変失礼ですが、日本から持ってきたもの、お使いいただきたいのですが・・・カメラ、腕時計、計算機何でもいいですから言ってください。」「高島さん、ありがとうございます。電池で動いているものは、ソ連にはそうした電池がありません。いただくわけにいかないのです。」「そんなことを言わないでください。何かあるでしょう。」

このようなやり取りの後、しばらくたってから、思いつめたように、絞った声で「高島さん、今身に付けている下着を頂くわけに参りませんか？」と言われたのです。下着と言っても1年間、ソ連の洗剤で繰り返し洗濯したものです。色も多少薄黒くなっています。驚きましたが帰りの分だけ残して夏物冬物下着からYシャツ、セーターなど殆ど差し上げました。「寺島さん、ほかには無いですか？」と言いましたら、しばらく沈黙の後、控えめに「息子が釣りが非常に好きなのです。娯楽室にある日本製のリールを頂けないでしょうか？」と言われました。お安い御用ですと、持ってきたものの一度も使わなかったリールを4個差し上げました。非常に喜ばれました。なぜならソ連製は、釣り糸を1回まわすと1回だけまわるタイプなのです。

時間はアツという間に過ぎてしまいます。帰国の日が迫り、我々は嬉々としていましたが、寺島さんは口数が少なくなりどこか寂しそうでした。出発の日が来ました。寺島さんは朝早く起き、自分が出かけるのでもないのに革靴を履き、小綺麗な服装をして帰国者との簡単な挨拶が終わると、一番最初にお会いしたホテルのロビーの時のように玄関の隅っこの椅子にきちんと座って何もしゃべらないで出発を待っていました。私には、「良かった」と言ったきりあとは一言も話をしないで視線も避けているようでした。まもなくバスが来て帰国の人達ががやがやと乗り始めました。最後に私が、プロマネ、通訳の方々、魚国のコックさん、ソ連の監督官、最後が端っこにいた寺島さん、順番に一言ずつ声をかけて握手でお別れです。寺島さんとはお互いに一言も声をかけず手を握って少し長いお別れをしました。今でもその時の手の温もりが忘れられません。

バスが出発し、やれやれと思った時後ろを見るとほこりが舞い上がっている宿舎の前で寺島さん一人だけいつまでも手を振っていました。皆に見られないようにしながらこらえきれず涙を流しました。寺島さんは日本との絆が一本一本たち切られて行くような感じがして非常に寂しかったのだと思いました。

こちらに来てちょうど1年、途中一度も帰国したことはありませんでしたが、長いような短いような1年が終わりを告げました。（続く）

中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて (1)

為我井輝忠

長いこと中央アジアのシルクロード（絹の道）の国々を旅してみたいと思っていたが、図らずも10月（2018）に実現し、キルギスとウズベキスタンを訪ねることが出来た。当初、キルギスだけを訪問の予定であったが、一国だけでは不十分な気がして、隣国のウズベキスタンへも足を伸ばしてみた。10月13日から11月1日までの約20日間この2か国を訪ねた。

キルギスについては4～5年前まではあまり知らなかった。最初はこの国のことを「キリギス」と思い込んでいた時もあったくらいだ。ところが、ある時期、国土舘大学に留学中の学生3人と知り合う機会があり、彼らの勉学や生活面の相談を受けたり、キルギス料理を教えてもらうなどしているうちにこの国に興味を覚え、実際に行ってみようと思うようになった。調べると、日本からの直行便はなく、ソウルかモスクワあるいは中国経由になり、かなり不便である。料金を調べると、モスクワ経由がそんなに高くなかったのでアイロフロート・ロシア航空を選んだ（帰路は、ドバイ経由のエミレーツ航空となったが）。

今回の旅行には二つの目的があった。一つは第二次世界大戦後、多数の日本人兵士がソ連に抑留された後、キルギスとウズベキスタンに連れてこられて労働に駆り出されたことを以前から知っていたので、彼らの足跡を辿ってみたいと思った。もう一つは、国土舘大学に留学していた3人のうち、すでに帰国していたAdilet（アデイレット）君に会うことであった。

10月13日、成田からモスクワまで飛んだ。10数年前ヨーロッパへ行く時もモスクワに寄ったが、その時の印象は空港全体が薄暗く、何だか陰気臭いという印象を受けた。が、今回はそんな感じは全くなく、明るく、ヨーロッパの都市と変わら



ないくらいであった。5時間の待ち合わせの後キルギスの首都ビシュケクに向かい、5時間ほどでマナス空港に着いた。到着時間は早朝6時30分であったが、空港ではあらかじめお願いしてあった旅行社のガイドが迎えに来ていて、すぐホテルに向かった。

今回の旅行はビシュケクにある日系の旅行会社にアレンジしてもらい、ガイドと共に日本人ソ連抑留者たちが労働に駆り出されたイシク・クル湖畔にあるタムガ村を訪ねることからスタートした。

1946年5月に中国旧満州から移動してきた数千人もの抑留者たちがウズベキスタンやキルギスへ到着し、その内の125名がキルギスのタムガ村へ移動させられた。彼らは建設途中のサナトリウムの建設と道路の建設に携わり、およそ2年間ここで労働に携わった。

私がこのようなキルギス抑留者の事績に興味を覚えたのは、実は2008年頃の朝日新聞多摩版で宮野 泰氏という方がキルギスでの抑留生活の体験をレポートした記事が載っていたのを読んだ記憶があったからである。その時はキルギスという国のことは記憶になく、ただ中央アジアというだけで、ウズベキスタンという国のことも出ていたという程度の記憶しかなかった。

昨年、偶然にも『キルギス抑留の記録 タムガ村での600日』という



宮野 泰著『キルギス抑留の記録 タムガ村600日』（2013年、新潟日報事業社刊）



日本人抑留者たちが建設に携わったタムガ村のサナトリウム

本に出合った。この本の著者は宮野 泰で、私が 10 年前に新聞で知ったあの人であった。この本を読み、彼らが悲惨な当時の抑留生活にもかかわらず 2 年後誰一人亡くなることもなく全員帰国したと知った。それならば彼らが抑留されたところを訪ね、彼らが建設したサナトリウムを見たいと思った。宮野氏はこの時 20 歳で、建国大学中に召集され、旧満州奥地で 1 年間兵役についていたが、1945 年に終戦を迎え、すぐ帰国できると思っていたら、ロシアを経て、この地に連れてこられた。1947 年帰国することが出来たが、彼はその 60 年後にさらに数年経た後にもこの地を訪れた。抑留中と再訪時の記録が本書である。

10 月 14 日、ビシュケクを出発。いろいろなところを寄りながら途中 1 泊して、翌日タムガ村に着いた、ここはどこにでもあるような寒村で、特別変わったところがあるようには思えなかった。しかし、村の中央に立派なサナトリウムがあり、ここが抑留者たちによって建設された療養所だとすぐわかった。ゲストハウスに荷物を置き、早速出かけた。サナトリウムはかなり広い。広大な敷地に木々に囲まれた建物が点在し、まるで公園のようである。ガイドの案内で、見て回った。

タムガ村は冬そんなに寒くなく年間を通して温暖な気候のためここに療養所や別荘、ホテルなどあり、ソ連時代の宇宙飛行士のガガーリンもここで長期療養をしたそうで、写真がたくさん残されていた。

敷地の中央にこれまでに何

度も見たことがあるような建物があった。それが 125 名の抑留者たちが建設に携わったサナトリウムである。誰もいない。静かなところにぽつんと建っている 2 階建ての建物は 70 年前の建物そのものであった。中には入ることは出来なかった。建物の前には桜の木が何本も植えられていた。彼らは山から石を運んで来たり、コンクリートをこねたり、材木を切ったり等と慣れない仕事を 2 年間労働に携わった。このほかにも湖に出る道を整備することもした。療養所内には「抑留記念室」があり、当時の記録、写真、資料等がぎっしりと展示されていた。宮野氏のこと詳しく紹介されていた。しかし、残念ながらロシア語での説明のためあまり内容が分からないでいると、ガイドが説明してくれた。説明を聞きながら、宮野氏や彼の仲間がたどった苦労や足跡を思うと、自然と涙が出てきた。

2 年間の労働の間にも、村人との交流が多くあった。彼らから食べ物を貰ったり、中には村の女性と仲良くなった兵士もいたそうである。帰国後もそうした村の人々との思い出が長く伝えられてきた。泊めていただいたゲストハウスのタマラおばさんもそうした一人である。年齢は 60 代後半なので抑留者たちと直接接したことはないが、祖父母や両親から聞いていて、抑留者たちの生き字引みたいな方であった。宮野氏もタムガ村を訪ねた時はここに泊ったそうである。翌日詳しく話を聞かせていただいた。写真を始め宮野氏が再訪時に載った日本の新聞の切り抜きを見せていただいた。なぜそんなに抑留者たちのことに関心があるのかと尋ねたところ、「彼らは最初は大変怖い存在であったが、徐々に人間的に心優しい人だとわかり、村人とも仲良くなった。そうした思い出が村人の間に残り、私の祖父母や両親からも聞かされていた」と話してくれた。

タムガ村では翌日雪が降っていた。キルギスではもう初冬であった。様々な話を思い出しながら、ビシュケクに戻った。(続く)



タムガ村のタマラおばさん

“わりい”の催し 2018年度 第12回市民協働フェスティバル「まちカフェ」

2018年12月2日（日）10:00～16:00 場所：町田市役所全館

第12回市民協働フェスティバルの「まちカフェ」が、昨年12月2日（日）に町田市役所の1階から3階のフロアーいっぱいにかれました。正面玄関付近にはいくつもの飲食のコーナーが設けられています。年々盛んになっているようですが、今年のテーマは「未来と感動を共有するまちだ」です。町田市内で活動するNPO団体、市民サークル、町内会、自治会などの約80に上る団体が一堂に会し、活動状況の発表や手作りの工芸品、取れたての新鮮な地場野菜の販売などを通じて交流を深めるイベントです。

フェスティバルは、午前10時に石阪市長の開会宣言でスタート。わりいは今回が4度目の参加で、前回同様ラオスの少数民族のモン族の刺繍小物の販売と、午後からは恒例の満さんの水墨画教室を開きました。わりいの割り当てスペースは、これまで2階や3階でしたが今回初めて1階となり、しかも正面玄関に近く人通りの絶えない場所になったので、筆箱、保険証入れ、財布などのモン族の小物はかなり販売することが出来ました。山岳民

族で貧しい生活をしている少数民族をわりいが支援していることを知り、わざわざ遠くから足を運ばれ沢山購入して下さった方も何人かいらっしゃいました。ちなみに蒙の小物は、織り方がしっかりしておりデザインと色合いも素晴らしく何度洗濯しても型崩れしないのが特徴です。

水墨画教室は、前回に続き今年の干支である「亥」が題材にされました。子どもさんの参加が多く、今回は午後の2回だけの教室でありスペースも限られているのでお断りする方もいました。子どもさんの後ろで見ていた親御さんたちは、「水墨画っていいですね。来年の年賀状はこの絵にしようと思います」と言われていました。水墨画は展覧会などで見ることはあっても、実際に自分で描いてみる機会はほとんど無いので子供さんたちは目を輝かせながら取り組んでいました。

わりいのメンバーは、子供さんたちに寄り添いお手伝いしていましたが、喜び顔を見ながら充実感に浸っていました。「まちカフェ」は、午後4時にお開きとなりました。

（報告：寺西 俊英）



中国の笑話 39 (「365 夜笑話」より)

■第 133 話 一丸となる

父親が、息子の成績通知表を見ていた。「素行評価」の欄を見ると、急に顔色を変えておこり、子供に平手打ちを食らわせ、大声で怒鳴り始めた。

父親「正直に言いなさい！ どうしてお前は学校でいつも殴り合いの喧嘩をするんだ？」

子供「ボク、喧嘩なんか、喧嘩なんかしてないよ！」

父親「フン、未だ強情をはるのか？ここに能和同学打成一片（同級生と思いきり〈一丸となって〉殴り合いをする）と書いてあるじゃないか」

[能和同学打成一片の本来の意味は（同級生と、打ち解けて仲良くすることが出来るの意。]

■第 134 話 先生に教える

子供が初めて学校へ行って帰って来た時、母親が子供に訊いた。

母親「坊や、今日は先生、何を教えてくださったの？」

子供「先生は教えてくれなかったよ。反対に、僕に1に2を足したら、いくつになるのって訊くから、僕は、1足す2は3ですよ、って教えてあげたよ」



【'わりりい'の原稿を募集しています】

'わりりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これはと思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル'わりりい'

'わりりい'は、新入会をいつでも歓迎。年度途中に入会は会費の割引があります。お気軽にお問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座 00180-5-134011

名義 — わりりい

★'わりりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めています。会員になりますと、

①年10回(2月・8月を除く)“会誌わりりい”を送付します。

②'わりりい'の活動の全てに参加可能です。

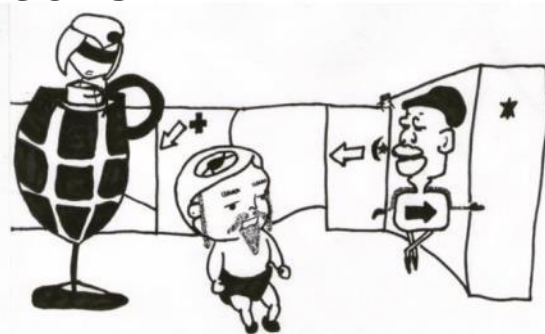
問合せ：044-986-4195 (寺西)

◆インターネット会員：メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しいカラー版'わりりい'を送付。こちらは会費無料。

◆町田市民フォーラム 4F・町田国際交流センター、まちだ中央公民館 6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

~~~~ようこそ! Samira イラスト館へ!!~~~~

~political situation s~



●恒例! ‘わんりい’新年会日取り決定!! 2019

‘わんりい’新年会・シュワンランロウで新年を祝おう!

- 場所：麻生市民館・料理室  
小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内
- 日時：2019年2月3日(日) 11:00~14:00
- 定員：先着40名(‘わんりい’会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費、シュワンランロウ材料及びビンゴ景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp  
TEL/FAX：042-734-5100(わんりい)



●【わんりいの催し】中国語で読む・漢詩の会  
漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!! 録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 場所：まちだ中央公民館・視聴覚室  
小田急線町田駅南口/JR 横浜線ルミネ口徒歩3分町田市原町田6-8-1
- 日時・場所：10:00~11:30  
2019年1月13日(日) 視聴覚室  
2019年2月24日(日) 第3・第4学習室
- 講師：植田渥雄



- (桜美林大学名誉教授/現桜美林大学孔子学院講師)
- 定員：20名(原則として)
- 参加費：1500円(会場使用料・講師謝礼)
- 申込：TEL/FAX：090-1425-0472(寺西)  
メール：ukiuki65jpp@yahoo.co.jp(有為楠)

●【わんりいの催し】ボイス・トレをして日本の歌を美しく歌おう!

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう!! 声は健康のバロメーター! 気持ち良く歌って毎日元気!!



- \*動きやすい服装でご参加ください
- 場所：まちだ中央公民館・視聴覚室  
小田急線町田駅南口/JR 横浜線ルミネ口徒歩3分、町田市原町田6-8-1
- 日時：1月29日(火)、2月5日(火) 10:00~11:30
- 講師：Emme(歌手) ■定員：15名(原則として)
- 参加費：1500円(会場使用料・講師謝礼)
- 申込：TEL042-735-7187(鈴木)

●【中国文化センターの催し】①  
天津文化年第一弾 天津春節民俗展「新年の思い出」  
土着の運河文化と海洋文化も合わさり独特な民俗文化を形成している天津は、美術や曲芸、戯曲、游芸、飲食など天津の文化は豊富で多様です。一年に亘って天津文化を紹介する第一弾!

- 場所：中国文化センター  
港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F
- 会期：1月8日(火)~18日(金)(土日祝休館) 10:30~17:30  
(初日：15:00~/最終日13:00迄)
- 開幕式：1月8日(火) 15:00~  
実演：年画・毛猴

■先着80名 ■申込 中国文化センターHPで  
■集中講座(中国文化センターHPより申し込む)  
\*そのI「麵塑」/講師：王均(日本語通訳あり)  
1月16日(水) 15:00~16:30  
定員：20名

\*そのII「盤釘」(チャイナボタン)  
講師：楊洪翠(日本語通訳あり)  
1月17日(木) 15:00~16:30  
■定員：20名

■参加費全て無料  
■問合せ：03-6402-8168(中国文化センター)

●【中国文化センターの催し】②  
「中国チベットタンカ芸術展」  
1300年の歴史を持つチベット族の芸術タンカ。鮮やかな色彩で神聖な仏教世界が表現され、チベット族の独特な民族性、宗教性、芸術性を色濃く示す。

- 場所：中国文化センター  
港区虎ノ門3-5-1、37森ビル1F
- 会期：1月29日(火)~2月14日(木) 10:30~17:30(土日祝休館)
- 開幕式：1月29日(火) 14:00~17:00  
開幕講演/開幕公演「チベット歌舞」/タンカ及びチベット書道の実演制作
- 先着80名 ■申込：中国文化センターHPで
- 開催記念イベント  
▶1月30日(水)「チベット歌舞」/タンカ及びチベット書道の実演制作 ■定員：80名
- 開幕式及び記念イベントは中国文化センターHPより一括申込みです。■参加費全て無料
- 問合せ：03-6402-8168(中国文化センター)

【1月定例会開催日】

- ▶定例会：1月22日(火) 13:30~  
三輪センター・第三会議室  
主な議題：新年会について。どなたも参加できます。
- ※‘わんりい’会報は2月は休刊します。次号は3月号です。問合せ：☎044-986-4195(寺西)

●【中国文化センターの催し】③

■迎春送福書法展

「春來福到」をテーマに、中日両国の書道家創作の様々な「福」の書や春聯を約 100 点を展示。開幕式では、書道家による「送福」揮毫会を予定。

■場所：中国語センター

港区虎ノ門 3-5-1 37 森ビル 1F

■会期：1月22日(火)～25日(金)、平日：10:30～17:30(最終日：13:00迄)

■開幕式：1月22日(火) 15:00～17:00

▶開幕式参加は先着 70 名 ■参加費：無料

■申込：中国語センターHPで

■問合せ：03-6402-8168(中国語センター)

●初心者体験歓迎！【鶴川水墨画教室】▶見学無料

今年の干支「亥」に挑戦は如何？

■体験参加1000円(手ぶら可)

■第2又は第4月曜日

14:00～16:00

■会場：鶴川市民センター

195-0062町田市大蔵町81-4 ※駐車場あり

■講師：満柏(日中水墨協会会長)

■問合せ：☎042-735-6135(野島)



●日本中国友好写真協会第2回公募写真展

第10回ゲーサンメド写真展

▶「中国少数民族地帯に行く」▶参加無料

■会場：富士フォトギャラリー銀座スペースI&II

中央区銀座1-2-4サクセス銀座ファーストビル4F

■会期：1月18日(金)～24日(木)▶平日10:30～17:30▶土日祝日11:00～17:00▶(最終日：14:00迄)

■主催：日本中国友好写真協会

NPOチベット高原初等教育建設基金会

■問合せ：ゲーサンメド TEL：03-5912-1232

メール：[wusa@gesanmedo.or.jp](mailto:wusa@gesanmedo.or.jp)

●「着るアフリカ展」 ■参加無料

アフリカのファッションに注目し、コンゴの独特のカルチャー「サプール」の写真や、東アフリカの布「カンガ」、ルワンダ出身のアーティストの作品等、アフリカの「衣」文化を紹介

■場所：あーすぷらざ 3F 企画展示室

横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 JR根岸線「本郷台」歩3分

■会期：1月19日(土)～3月24日(日)

(2月11日を除く月曜日・休室)

■主催：あーすぷらざ

指定管理者(公社)青年海外協力協会

■問合せ：TEL：045-896-2121

【映画】川崎市アートセンター アルテリオ

麻生区万福寺 6-7-1 ☎044-955-0107

小田急線新百合ヶ丘下車/北口5分

休館日：毎月曜日。月が祭日の時はその翌日休館。

①「ガンジスに還る」2016/インド/1h39

インドの聖地バラナシを舞台に死期を悟った老人とその家族の物語 ■上映時間は問合せ下さい。

■上映期間 1月4日(金)～25日(金)

②「あまねき旋律」2017/インド/1h23

どこまでも続く棚田にこだまする歌声

新規オープン！中華料理「百味苑」

‘わりい’とかかわり深い京劇俳優・殷秋瑞さんの奥さんが町田街道沿いに中国家庭料理のお店を新規に出します。応援よろしくお願ひします。

12月28日(金)～1月31日(木)(12月31日・1月1日休業)

特別メニュー・特別価格のプレオープン

昼 11:00～15:00 夜 17:00～21:00

(ラストオーダーは営業時間の30分前です)

場所：町田市木曽西 5-20-8 ☎042-866-5883

使用済み古切手と書き損じの葉書で支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついでに折に田井にお渡し下さい。



‘わりい’240号の主な目次

|                             |       |
|-----------------------------|-------|
| 寺子屋・四字成語 ⑩ 一諾千金……………        | 2     |
| 論語断片(43)「益者三友、損者三友」……       | 3     |
| 五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(5) …  | 4     |
| 東西文明の比較(31)「古事記」と「日本書紀」……   | 6     |
| 四姑娘山写真だより⑩女王谷の石積み塔(2) …     | 8     |
| 「漢詩の会」26『臨安の邸に題す』           |       |
| 『夜受降城に上りて笛を聞く』…             | 9     |
| 陝北の旅 報告Ⅲ ……………              | 12    |
| 海外出張の思い出・旧ソ連⑩ ……………         | 15    |
| 中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて(1) … | 17    |
| 活動報告「まちカフェ」 ……………           | 19    |
| 中国の笑話39 ……………               | 20    |
| サミラさんのイラスト館……………            | 20    |
| ‘わりい’掲示板 ……………              | 21/22 |